

赤い兎の目と戦争の記憶

ジャーナリスト 堀内正範

灯火管制の下で。

昭和13（1938）年に東京・渋谷で生まれたわたしの目に焼きついている戦争の鮮明な光景がある。いつの日のことであるかはわからない。

その夜、灯火管制でうす暗い家の中が急にざわめいて、大人たちがみんな二階に駆けあがり、物干しや道路側の雨戸を細くあけて夜空を見上げた。わたしも雨戸の隙間から、おそるおそる夜空を見上げた。何本かの探照灯の帯に照らし出されたアメリカのB29。向かって迫っていく日本の戦闘機。高射砲弾の煙と音。子どもの目でそれぞれの距離感は測りようもなかったが、B29はゆうゆうと上空を横切っていった。

おそるおそる覗き見たあと、ひとり取り残されたわたしのからだを振るわせていたのは、恐れではなく、ひそかに知った敗北感のようなものだった。

父と母の挫折。

それからまもなく、母と子どもたち（わたしと妹）は父方の実家がある群馬県の農村に疎開することになった。父は農家の次男坊で、東京へ出てきて小さな工場を経営していた。母は勝気な江戸娘で、銀座のデパートづとめをしていたころ、有名な女優さんが買い物をするシーンにいっしょに出演したことが自慢で、何度も繰り返し聞かされた。少年のわたしは両親の持ち味の違いに戸惑ったが、そんなとき、無口で実直な父のほうに味方した。

父の実家近くで借家暮らしをはじめてほどなく、東京の大空襲で父の工場は焼失し職人たちは散っていった。戻ってきた父の憔悴した姿や話から、東京での戦禍のようすとともに父の労苦が跡かたもなくなり、都会育ちの母は暮らしの基盤を失ったことを知った。わたしは東京で失ったものより、目前で得ているもので十分満たされていた。

疎開先での暮らし。

戦禍を避けて農村で過ごした日々の記憶からは、避けようもなくあったはずの戦禍の情景が浮かんでこない。わたしは本家のいとこたちや学校の仲間とすぐに馴染んで暮らすことができたし、ひとりでも、都会にはない四季折々の風物の変容に目を見はって過ごした。小学校に入ったときが終戦の年で、終戦の日は学校に呼び出されて、校長や先生方からいろいろな話を聞かされて、わけがわからないまま、ひたすら明るい気分になって家まで走って帰った。

榛名おろしの空っ風、2キロの学校道。途中にある八幡さまの社と杉の並木、信越線の細く長い線路、野外映画会を見た校庭、春風と疾風のようなふたりの女先生、墨を塗った教科書、すぐ破れてしまった運動靴、ドドメ（桑の実）、モモの摘果、ウメのひこばえ、道祖神の火、「鐘の鳴る丘」、草を食むウサギ、ぶっちめのスズメ、流し針のウサギ、田んぼのヒル・・・。

しかしわたしは自分には見えない都会少年のシッポを付けていたにちがいない。将来のためといって母が着せた“衣装”のせいであったかもしれない。

赤い兎の目の記憶。

ある日、家の壁に寄り添うように小さな兎小屋ができた。わたしは発見したのだから、妹が求めたものだったのだろう。それでも毎日、摘んできた草の束を扉を開いて放りこんだ。すると奥から兎が跳んで出てくる。赤い目でじっとこちらを見つめてから草を食べた。そのようすをこちらもじっと見つめた。危険を察知する大きな耳と跳んで逃げる後ろ足。戦うべき機能をもたない兎。ぴくぴくと動く鼻とじっと見つめる赤い目が記憶に残った。ある日、草の束をもって小屋にいくと、もうそこに兎はいなかった。死んだのか、逃げたのか、他の動物に襲われたのかはわからなかったが、聞くこともなくそのまますぐに忘れた。にもかかわらず、その姿がその後いくどとなくよみがえる。

「ふるさと」の喪失。

小学5年生の1学期の途中で、わたしはみんなと別れて東京に戻るようになった。母の強い意向だったのだろうが、東京での暮らしの不安は胸のなかに渦巻いていた。

担任の疾風先生は親しかった何人かの仲間といっしょに信越線の踏切まで見送ってくれた。線路を渡ってひとりになったわたしは、振り返ることもなしに八幡さまの社に向かって、杉並木の道を走った。背中に感じた先生と親しかった仲間たちとの「別れの間」は、いまも忘れられない「ふるさと喪失」の記憶である。みんなからは帰っていくべきところと思われていた東京は、わたしにとっては帰らねばならないところではなかったからである。

戦後68年の追悼式の黙とう

戦後68年の8月15日。正午。310万人という戦没者の霊に1分間の黙とうをささげた。「全国戦没者追悼式」(武道館)には、最高齢大正3年生まれ99歳の女性が、戦争で亡くした夫と家族のために参列していた。同じく戦争で夫を亡くして、いままだ健在でおられるという春風先生のやさしい姿を重ねて思い起こしていた。

黙とう・・・その間、戦争に翻弄された父母が眠る「父のふるさと」の風景が流れて、最後にまた赤い目の兎と出会った。

天皇のおことばは「本日、戦没者を追悼し、平和を祈念する日にあたり・・・深い悲しみを新たにいたします・・・ここに歴史を省み、戦争の惨禍が再び繰り返されないことを切に願い・・・世界の平和とわが国のいっそうの発展を祈ります」というものだった。恒例のおことばであったが、「平和を祈念する」ということばに思いを感じた。

「雪中高土」のように。

疎開して借りていた家はすでに朽ちたが、わたしが植えたウメのひこばえは、老樹のたたずまいをして立っていると聞いた。わたしもあれから60年余を大都会で過ごして、いま此処に老樹のたたずまいで立っている。願わくば、親木がそうであったように、冬の雪の野に「雪中高土」として立ち、春先に幾輪かの香りのいい花をつけてほしいものである。(朝日新聞社社友)